

## 「オートル」(Autres)

«Autres»とは、フランス語で〈ほかの〉とか〈違った〉という意味です。16世紀の西欧は、大西洋の向こうに〈ほかの違った〉人々が存在することを「発見」し、その広くなった世界全体を一つのシステムに組み込もうと企図して、結局人類史上最大とも言われるジェノサイドを引き起こしてしまいました。しかしその時代、次のように断言できた人もいます。「私はこの新大陸の住民たちには野蛮で未開なところは何もないと思う。おのおのが自分の習慣にないものを野蛮と呼んでいるだけなのだろう。本当のところ、私たちは自分のいる国の意見や慣習のもつ実例と観念のほかには、真実と道理の基準を持っていないようだ。その土地にもやはり完全な宗教があり、完全な政治体制があり、すべての事柄についての完璧な完成された習慣がある」(ミシェル・ド・モンテーニュ「人食い人種について」)。21世紀の私たちはどういふ〈ほかの違った〉人たちを前にしているのでしょうか、そしてどのような態度を取ろうとしているのでしょうか。それとも私たちは、〈ほかの違った〉世界を見ることそれ自体がもはや意味を持たない時代を生きていると言うべきなのではないでしょうか。

「グローバル」、「国際」、「越境」。はまり込んだ井戸を越えて地球的規模に視野を広げ、そこから発想したり考察したりすることは21世紀の現在ではどのような分野でも強調されていることです。しかし人間の視野や視力には限界があり、高く上がって全体を俯瞰できたという確信を得ても、それは独りよがりや幻想にすぎないかもしれません。また、広げられた視野の中に入っているはずの膨大な個々の細部は、逆説的ですが、むしろ見え難くなっています。茫々と広がる砂漠の中で、天を見上げてそこに星座を見つけると、世界も自分もつかめたような気になり、ほっとします。おそらくアリストテレスの先天的奴隷人説もそういう星座の一つだったのだと思います。これを介して、ヨーロッパは自らを支配の責務を担うものとし、原住民を支配されることで幸福を得るものとする歪んだ共生の形を作り出してしまいました。しかし宇宙の側に星座の根拠はなく、それは井戸の底からの視線に依存する表象にすぎません。

人間の視野や視力を限る壁は、国境や収容所、服装や肌、性や年齢、職業や収入、信仰や趣味など様々です。また苦しみや楽しみ、愛情や憎悪、記憶や憧

憬など目には見え難い壁もそれに劣らず多様です。地上の世界には無数の壁が走っていて、私たちは何重にも囲われています。

ベッドから追い立てられ、家畜のように貨車に閉じ込められ、ガス室で殺害されていった多数の人々は、決してずっと「夜と霧」の中に隠されていたわけではなく、仕事を持ち家族を持つ人たちの前を、白昼、あるいは泣き叫んで、あるいは苦悶の表情を浮かべて、通って行きました。その姿は、それが確実に視野に入っていた人たちの目には、どのように映っていたのでしょうか。

分野を限ることで専門的な研究を深めることはできるのでしょう。星座の体系をより精密に描き出すこともできるのでしょう。しかしそうして私たちは井底の蛙の管見に研究者アイデンティティを託しているだけなのかもしれません。既存の枠組みからできる限り身を振りほどいて、〈ほかの違った〉パラダイムを目指してみる。見えない井戸の壁は何重にも張りめぐらされている以上、それは非常に困難なことです。「一番大切なものは、目には見えない。」20世紀最大のジェノサイドが進行しつつあった時代、いろいろな惑星の大人たちにほとんど何も学べなかった小さな王子は、地球の砂漠のキツネにそう教えられて、自分の小さな星に帰って行きました。王子が心の底でつかんだものは、王をはじめすべての大人たちに軽蔑されてしまう街灯点灯人の、「自分ではない、ほかの違ったものの世話をする」姿でした（アントワヌ・ド・サンテグジュペリ）。自分の井戸から覗ける天の一隅から視線を外し、壁の向こうに持続しているかもしれない、〈ほかの違った〉実在に心を合わせてみる。この非合理的にも見える、狭い迂路を通ることで、既存の星座のシステムを突き抜けることができるかもしれません。この研究室がそうした試みの場となることを念願しています。